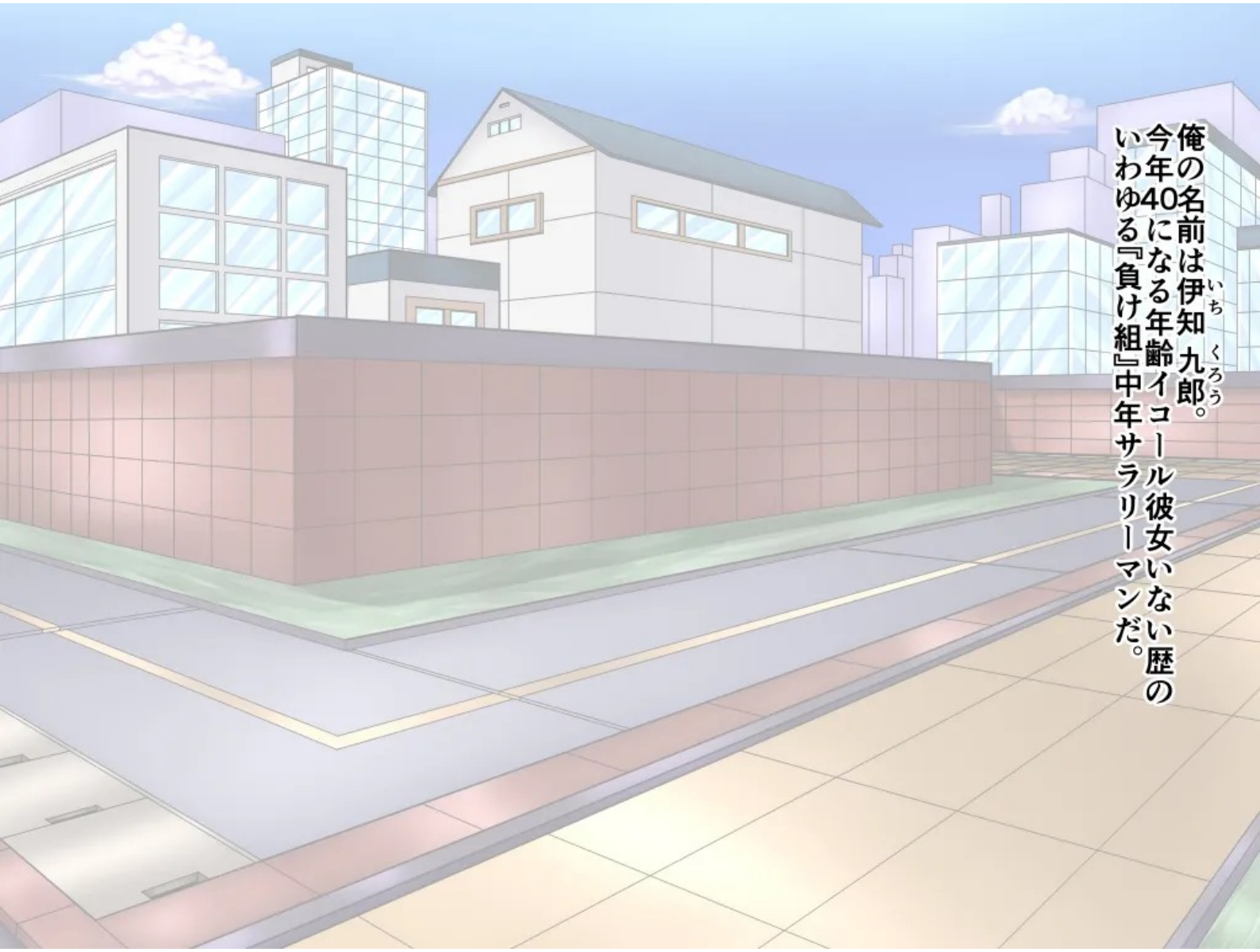

カイトリ¥オヤコ
～現役ギャルと淫乱母の
初ウリ×寝取り録～


俺の名前は伊知(いち)九郎(くろう)。
今年40になる年齢イコール彼女いない歴の
いわゆる『負け組』中年サラリーマンだ。


童貞卒業も上司に誘われて行った
風俗店……金を払わなきゃ
女とヤれないブサイク中年男の俺に――


いままさに信じられない出来事が
起きていた…。


「ねぇオジサン！私たちと…エッチしてくれない？」
「は……えぇ!?」


そう…今俺は退勤途中の道端で…
ギャルとその母親らしき人物に
逆ナンパをされていた…


「ききキミ！何を言ってるんだ!?
隣にいる方…この子のお母さんですよね？
何とか言ってあげてくださいよ！」


「もう！ママったらいまさら何迷ってるの！家で一緒にナンパするって決めてたでしょ！」
「あ…その…ええっと…」


「そ…そうね…えっと…お兄さん？
よろしければ私たちと…うぅ…
エッチなことしませんか…？」


「う…ぐっ…」
この母娘…いったい何考えてんだ!?
新手の詐欺!?怖い大男が連れ込まれたホテルで
出てくるとか…そういうやつか!?


「とっ！とりあえずここだと周りの目があるから…俺の家に来てもらえるかな？」
「おおっ♪オジサン話が早いね～さっそくヤる気になってくれたの？」


「違うよ！このままだと俺が警察に捕まりそうだから俺の家で事情を聞かせてもらうの！」
「うぅ…すみません……お言葉に甘えさせてもらいますね…」


数十分後…九郎の住むアパート


「お邪魔します…」
「へぇ～結構イイとこ住んでるじゃん！
オジサン選んで正解だったかも♪」
「ふぅ…あのねぇ…
まぁとりあえず適当に座ってください
…いまお茶でも淹れるんで」


お茶を淹れながら…俺は人生で初めて
女の子2人を家にあげるという事態に
困惑していた…
当たり前だ！俺は40歳の
非モテ中年男だぞ！


と…やり場のない感情を整理しつつ…
まずはこの状況を把握しないとな…
最悪俺が逮捕されてしまう…！


「それで…おふたりのお名前を
教えてもらえますか…？あとできれば
こんなことしてきた理由も」


「はい！申し遅れました…
私は藤永真理絵と言います」
「あたしは娘の理子！
現役ＪＫだよ❤」


「僕は伊知 九郎です…さて…
ええと真理絵さん？どうしてこんな
非常識…というか…突飛な行動を？」


「…つい昨年のことです…
この子の父親…夫の高橋と
別居状態になって…
理子と二人暮らしをしています」
「…でも女手ひとりで
高校生を育てるのが経済的に苦しく…」


「簡単に言うと～クソオヤジのせいで
お金に困ってるから母娘そろって
エンコーすりゃよくね？ってハナシ♪」


「そういうことか…でも理子ちゃん…
若い女の子がそんな簡単に
身体を売ったりしちゃいけないよ」


「え～何オジサンお説教？
友達だってお小遣い目当てに
フツーにやってるしぃ」


「つかあたしなりに
毎日遅くまでパートで
働いてるママのこと
考えてるっていうかぁ」


「こら理子！ダメでしょうそんな口をきいたら…
すみません九郎さん…私たち…これでおいとましますね」
「えぇぇ～!?せっかくナンパ成功したのに
帰っちゃうのぉ!?」


別に成功してねぇんだよなぁ…
しかし…真理絵さんの悲しそうな
表情を見ておきながら
放っておけないよな…


いや！というより！このチャンスを逃したら
一生こんなかわいい女の子達とセックスできないぞ！


「ゴホン！ほ…本当に…お金を払えば…
キミたちとエッチできるのかな？」
「えっ!?よ…よろしいんですか？
こんなおばさんと…」


「お～！話がわかるねぇ九郎オジサン❤
てかママ！何ひとりだけ稼ごうとしてんの!?
あたしがエンコー提案したんじゃん！」


まぁ…親である真理絵さんも了承してるし…
未成年とエッチしても問題ないだろ…
そもそもお金のためにやってるんだし
むしろこっちがお客なんだ！気にすることない！


…我ながらクソみたいな言い訳だ…
でも…こんな据え膳食わなきゃ損だろ…！


「よし…そうと決まればホテルに行こうか…ここだとさすがに色々とマズいし…それじゃあこれ…とりあえず20万」
「えっ…はい！こんなにたくさん…ありがとうございます！」
「うっそ…ひとり2万くらいだと思ってた…九郎おじさん…じゃなかった！パパすごぉい…❤」


一時間後…ホテル


本当に女の子を買ってしまった…
しかも美人親子…！


これは夢か…？いや夢でもいい！
とりあえず二人のカラダを楽しんで…


しかしふたりとも爆乳だな…
すげぇ気持ちよさそうだ…


「お…おまたせしました
九郎さん…」
「パパおっまた～♪
もう一人でシコシコしてたぁ？」
「い…いえ…！それより…真理絵さん…
その服…なかなかに刺激が強いというか…」


「あっその…私の学生時代のもので…
サイズも合わなくて…すみません
ご不快でしたらすぐに
私服に着替え直します…！」
「いえそんな！めっちゃ似合ってます…！」


「じ～～っ…ふたりともあたし放って
イチャつくのマジウザいんですケド…
ママの制服コスプレ提案したのもあたしなんだから
感謝してよねぇパパ❤」


「もう理子ったら…コホン！
えっとそれじゃあ九郎さん…？
なんでも…私たちにお申し付けください」


「あったりまえじゃん♪
20万も払ってくれた九郎パパには
大サービスしなきゃね❤」
「ゴクッ…本当に…なんでも頼んでいいの？」


「よし…じゃあ真理絵に理子…
今日は俺のことをご主人様と呼ぶんだ…
あとパンツを脱いでおまんこ見せてくれ」
「あっ…はい…かしこまりましたご主人様❤」


「ちょ…いきなりハズいんですケド…
でもまぁ約束しちゃったししゃーないかぁ…
わかりましたご主人様…❤」


うおおおおっ⁉
なんだこの強烈な眺めは…


「えっと…こんな感じでよろしいでしょうか？」
「うぅ…やっぱハズい…ぃ」


「すごい…真理絵のおまんこは経産婦と思えないほどきれいだ…」
「あうぅ…恥ずかしいですご主人様ぁ…❤」


「理子のおまんこはぴっちり閉じてて…もしかして処女？」
「う！うっさい！処女で悪い!?」


「それがご主人様に対する口の利き方か！おらっ処女マンコ開通！」
「ああっ…痛っ…!?」
ずっぷぅ
「あっ…理子の…娘の処女が…ご主人様に…❤」


「くぉっ…現役ギャルJKの生処女おまんこキツくて…気持ち良すぎる…！」
あっ♡
ぐちゅ
んっ♡
ぬちゅ
ぐちゅ
んんっ♡
パン！パン！パン！


「あっ…あん…っ❤ご主人…さまぁ…❤あたしの処女…味わって…っ❤」
んっ♡
ぬちゅ
ぐちゅ
パン
パン
パン
あっ♡
ぐちゅ
ぐちゅ
パン


「まったく…こんないやらしい体でしかも処女？けしからんぞ理子！」
あっ
くちゅ
んっ
ぐちゅ
ぬちゅ
んんっ
ぐちゅ
パン
パン
パン


「うぅ…んんっ❤ご主人様のために…取っておいたん…だよ…処女…❤」
んっ♡
ぬちゅ
ぐちゅ
あっ♡
ぐちゅ
パン
パン
パン


「うれしいこと言ってくれるな…ぐっ…そろそろ射精するぞ」
あっ♡
くちゅ
んっ♡
ぐちゅ
ぬちゅ
んんっ♡
パンパン


「あぁっ…あたし…❤処女なのに…ご主人様のオジサン精液いきなり中出しされちゃう…ぅ❤」
んっ
ぐちゅ
んっ
ぬちゅ
ぐちゅ
ズチュ
パン
パン
パン


「出るっ！受け止めろ理子ォ！」
「あはぁあああっ❤❤❤」
ビュルルッ


「さて待たせたね…真理絵の熟成おまんこいただくよっ…！」
「あぁん❤数年ぶりのおちんぽ…きちゃいましたぁ…❤」
ずっぷぅ


「すごっ…すごいです
ご主人様…❤んはぁっ❤」
んっ♡
ぬちゅ
ぐちゅ
パン
パン
パン
あっ♡
ぐちゅ
ズチュ
ぐちゅ
パン


「ぐぉっ…こんなエロい体数年間も放っておくとか旦那さん不能かな？」
んっ♡
ぬちゅ
ごちゅ♡
パン！パン！
あっ♡
ぐちゅ
ズチュ
ぐちゅ
パン！


「あん❤そう…ですぅ…❤
夫は全然かまってくれなくてぇ…」
んっ♡
あっ♡
ぬちゅ
ぐちゅ
ぱんっ
ぱんっ
ぱんっ


「そうかそうか…じゃあこれからは俺専用の肉オナホになりなさい真理絵」
んっ♡
ぬちゅ
ごちゅ♡
パン!!
パン!!
あっ♡
ぐちゅ
ズチュ
ぐちゅ
パン


「なります…私…ご主人様の専用おまんこに転職しますぅ…❤」
んっ♡
ぬちゅ
ぐちゅ
ぱんっ
ぱんっ
ぱんっ


「ぐっ…みっちり
ねっとりおまんこが
締め付けてきた…
辛抱たまらん！イくぞ！」
んっ♡
ぬちゅ
ぐちゅ
ぱんっ
ぱんっ
ぱんっ


「イっくぅぅぅぅぅぅ♥♥♥」
ビクビク


「ふぅ…さぁてこれが契約完了の中出しだ…明日もお金を上げるから順番に私の家に来なさい」
「はいぃ…ご主人様…❤」
「ふふっ…ママったらもう完全にご主人様のおちんぽにハマってんじゃん…❤ま…あたしもだけど❤」


翌日
俺は真理絵を制服姿で
待ち合わせ場所に呼び出した。
なんで制服で来させたかといえば…
そっちのほうが援助交際っぽくて
興奮するからだ…！


「九郎さん…お待たせしました…っ」
「おっ来たね真理絵…制服にあってるよやっぱりスタイル良いからかな」


「もう…この格好で街中歩くの恥ずかしかったんですからね？」
「ハハハ…それじゃ早いとこホテル行こうか」


「ふふっ…しょうがないですね九郎さんは…❤
理子みたいに言うなら…『マジえっちぃ』ですね❤」
「うぐ…なんだか急に罪悪感が……」


そして…俺と真理絵は
他愛ない世間話をしながら
ラブホテルへと向かった…
なんというか…女の子と付き合うって
こういう感じなのかなぁと
物思いにふけったが、
これはれっきとした援助交際だと
言うことを思い出し我に返る。


「ふふふっ♪九郎さんって
誰かと付き合ったことなかったんですか？
こんなに素敵な男性なのに…私なら
放っておかなかったなぁ❤」
「う…うるさいなぁ…
お世辞はいいよ…こんなブ男
お金を払わなきゃ
女の子と関係持てないし…」


「…私…本当にお金に困ってたんです…
私たち親子からすれば九郎さんは…
白馬の王子様なんです」
「いや王子さまって…
君たちに頼まれたとはいえ
ただエンコーしただけだし…」


「あんな娘ですけど…理子は
私のことを考えてくれてて…
一生懸命考えて出た結論が
援助交際だったんです」
「九郎さんは娘の提案を笑わずに
受け入れてくれて…嬉しかった」
「真理絵……」


「だから私を…援助交際としてじゃなく…
本気で抱いて…欲しい……九郎さんに…❤」
「ゴクッ……それって…
俺が理子の父親に
なっちゃうってことだけど…
いいのかい？」


「それじゃあ…挿れるよっ！
ずっぷぅ
「あっ…❤九郎さん…っ❤」


ぬちゅ
ブッ
ズッズッ
ちゅぱちゅぱ
ちゅ♥
あっ♥
んん♥
パン
パン
「う…ごぉ……
昨日よりも密着してるせいか…
真理絵のこと全身で感じるよ」


ぬちゅ
プチュ
ズッズッ
ぬちゅぬちゅ
パン
パン
パン
あっ♥
んんっ♥
ちゅ♥
「ん…ちゅうっ♥
私も…九郎さんの体温…
感じちゃいますぅっ…♥」


ぬちゅ
プッ
ズッ
ズンッ
ぢゅぱっ
パンッ
ちゅ♥
あっ♥
んん♥
パンッ
「真理絵…これからはお金の心配はしなくていいからね…俺が君たち母娘を養うから」


ぬちゅ
プチュ
ズッズッ
ぬちゅぬちゅ
パン
パン
パン
あっ♥
んんっ♥
ちゅ♥
「んっ…♥嬉しい…♥
私…九郎さんの
お嫁さんみたい…♥」


ぬちゅ
ブチュ
ズッズンッ
ちゅ♥
パンパン
あっ♥
んんっ♥
パンパン
『みたい』じゃなく本当になれっ！俺の嫁になれ真理絵！」


ぬちゅ
プッ
ズッ
ズンッ
ぬちゅ
ぬちゅ
パン
パン
パン
あっ♥
んんっ♥
ちゅ♥
「んむっ…♥
なる…なっちゃいますぅ…♥
亭主よりたくましい
おちんぽで九郎さんの
女になりましゅうっ♥」


ぬちゅ
プッ
ズッ
ズンッ
ずちゅ
ズンッ
パン
パン
あっ♥
んんっ♥
ちゅ♥
「あ～出る出るっ…人妻子持ちおまんこに完全マーキングザーメン射精するよっ！」
「きてきてきてきてえええっ❤」


「んあああああっ♥♥♥♥」
ビクッ
「イぐっ！」
イきそ


「はぁ…はぁ…じゃあこのあと理子に会うから…きちんと伝えておくからね…」
「は…はい…♥♥」


真理絵との恋人セックスも
終わり…真理絵とはそこで
家に帰ってもらうことにした。
というのも――
あらかじめ隣の部屋に
理子を待たせておいたからだ。


母親の真理絵とのセックスの音を
隣で聞いていた理子の反応を見てみたい…
そんな好奇心からだった。


「やあ理子…こんにちは」
「あっ……ども」


「どもって…昨日と違ってずいぶん
他人行儀だね…」
「そりゃあエンコー
提案したのあたしだけどさ～…
なんかママとめっちゃラブラブしてて
ちょいフクザツっていうかぁ」


「そんなことないって！
理子だってかわいいよ！
イマドキのギャルって感じで…ほら！」
「へぇ～～？
じゃああたしのこと本当に
かわいいって思ってるかテストしよ❤」


「…んしょっと…ほら見て…
九郎パパに処女あげちゃった…
女の子の裸だよ❤」
「ゴクリ……や…やばい…同意の上と
わかっていても犯罪臭が…」


「…ね…パパ…あたし……
あなたに本当のパパに…
なってほしいって思ってるよ❤」
「き…聞こえてたんだね
…真理絵との会話」


「あたし…父親には恵まれなかったから…
九郎パパの優しいところに…
あたしのバカみたいな提案受けてくれたところにね…
マジで惚れちゃったていうか…」


「…ごめんあたしバカだからうまく言えないや…でも…父親としても男の人としても…パパのこと好きになっても…いい？」
「もちろんだよ…俺も…母親想いの優しい理子のこと好きだ」


「これが証拠だよっ！」
ブッ
ビクッ
ぬちゅ
パンパン
ズッ
ズッ
ぬちゃ
パン
「あっ…はぁっ♥
パパのぶっといの…
いきなりきたぁっ♥」
あっ♥んんっ♥


「くっ…さすがに処女卒業したてなだけあって…キツキツだね」
ブッ
ヌチュ
パンパン
ズチュ
ズチュ
パン
あっ♡んん♡


「あん❤あん❤だって…嬉しくて…おまんこしまっちゃう…よぉ❤」
あっ❤んん❤
ぬちゅ
パンパン
ズプッ
ぬちゃ
パン


「理子は淫乱だね…二回目のエッチで自分から腰ふってるよ？」
ぬちゅ
パンパン
ズプッ
ズプッ
ぬちゅ
パンパン
「あっ…♥♥らめぇっ♥言わないでぇっ…♥♥」
あっ♥んんっ♥


「理子っ理子っ！
そろそろ出すよ…
パパの愛情ザーメン
たっぷり出すからねぇっ！」
ブッビュッ
ぬちゅ
パンパンパンパン
ぬちゃ
パン
あっ♡んんっ♡


「きてきてきて❤理子のおまんこに…パパの精液ぐちょぐちょに中出ししてえぇっ❤❤」
あっ❤んんっ❤
ぬちゅ
パンパンパン
ズブッ
ぬちゅ
パン

びゅるっ
「イっくぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅ！」


「理子…今日からみんな家族だ…
帰ったらママに伝えておくんだよ？」
「う…うん…❤❤
これからよろしくね…
パパ…❤❤」


ふたりとの交際を始めてから数日…
真理絵と理子の両方と
何度もセックスをしてきた。
そして今日はついに…
いわゆる『家デート』をすることになった。


「九郎さんいらっしゃい♪
あ……『おかえりなさい』❤」
「たっ…ただいま！
…なんか新婚さんみたいだね」


「ふふっ…理子もすっかり
九郎さんに甘えてるし…
そろそろ本当に結婚…しちゃいます？」
「…そうだね…そうすれば
毎日ふたりとエッチし放題だし」


そんな他愛のない会話をしながら俺たちは寝室へと向かい…セックスを開始した。
あっ♡
ぶるっ…
ズチュ
パン
パン
ぬちゃ
くちゃ
ぷるっ
しかし…その最中突然真理絵の夫…高橋から電話が入ってきた。


「んっ…❤❤もしもし…
あなた…？電話なんて
珍しい…んんっ❤…
ですね……っ」
あっ♡
ぶるっ…
ズチュ
パン
パン
ぬっ
ぬちゃ
ぬちゃ


本当にいまさらだと俺も思った。
娘の理子がどんな思いで援助交際に
踏み切る決意をしたのか――
あっ♡
ぶるっ…
ズチュ
パン
パン
ビクッ
ぷしっ
ぷちゅ
くちゅ
そして夫に見放され
女手一つで子育てに
尽力してきた真理絵を
思うと…高橋に怒りを感じた。


「本当のことを言うんだ真理絵…俺とのセックス聞かせてやれよ」
あっ♡
ぶるっ…
ズチュ
パン
ぬぷっ
ぬちゃ
ぬちゃ


あっ♡
ふるっ…
ズクッ
ぐちゅ
ぱっ
パン
パン
「いま…お付き合い…
してる方がいてっ…♡
そう…とても…優しいのっ…♡」


「セックスしてるとハッキリ言うんだ」
独占欲からつい催促してしまう。
あっ♡
ぶるっ…
ズチュ
パン
パン
ぬちゃ
くちゃ
ぐっぽ


あっ♡
ふるっ…
ズチュ
パン
パン
ズクッ
ぐちゅ
ぐちゅ
「は…はいぃ❤❤
いま…その人と…せ…
セックス…してるんです…❤
あなたと…比べ物にならない
くらいすごいんですよ…❤❤」


「いい子だね真理絵…
どれくらい気持ちいいか
言ってごらん」
あっ♡
ふるっ…
ビクッ
ズチュ
パン
パン
ぬちゃ
くちゃ
ぐっぽ


あっ♡
ビクッ
ぷるっ…
ずちゅ
くちゅ
ぐちゅ
ズチュ
パン
パン
「すごく…んはぁっ❤❤
頭真っ白になるくらい
気持ちいいのぉっ❤❤」

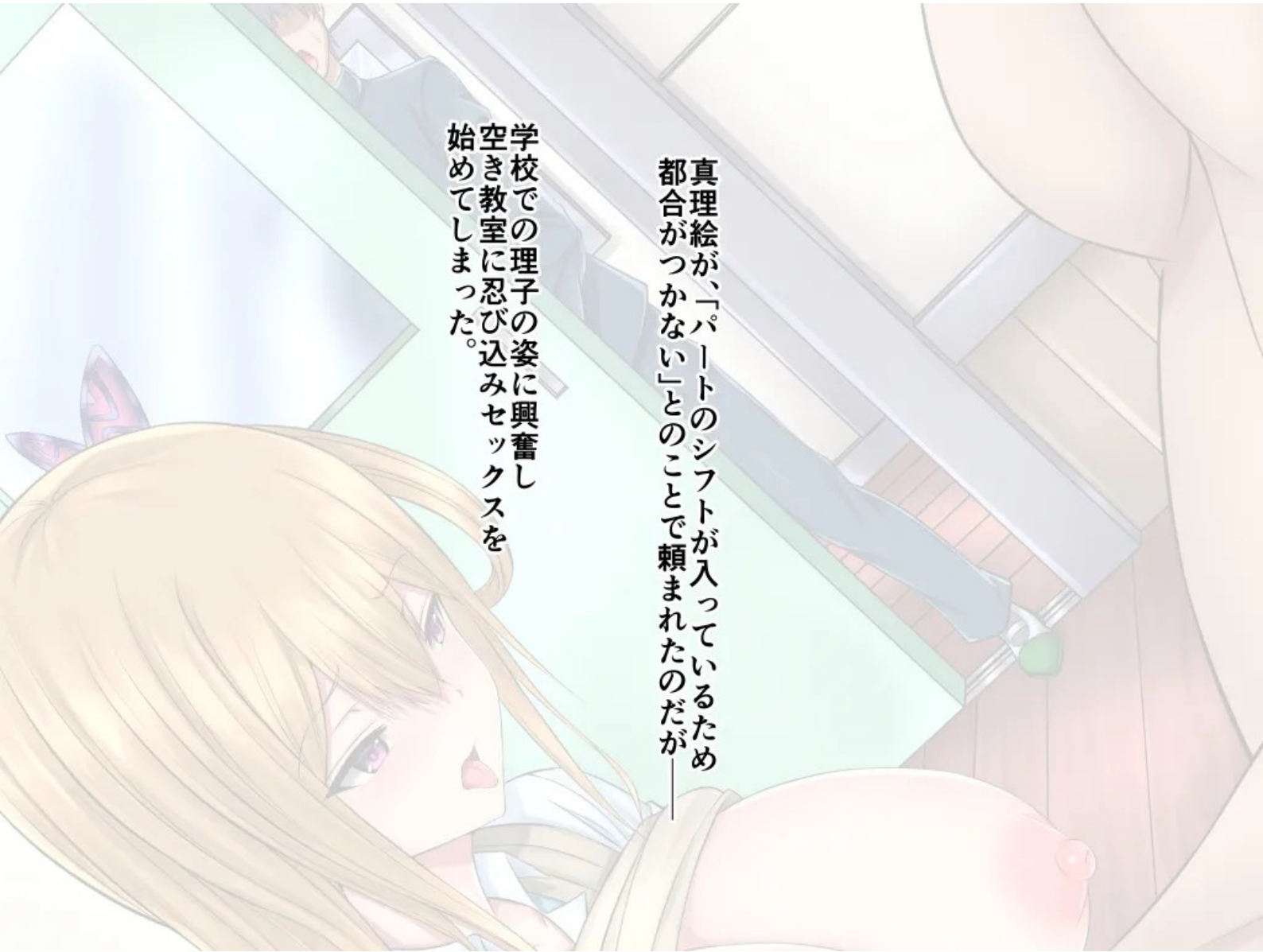

「ぐぅっ…そろそろ出すぞ…
旦那との電話越しに
人妻浮気おまんこ
アクメ射精決めるぞぉっ！」
あっ♡
ビクッ
ぶるっ…
ズチュ
パン
パン
ぬちゃ
くちゃ
ぐりっ
ぐりっ


あっ♡
ふるっ…
ズチュ
パン
パン
ズクッ
ぬぷっ
ぬちゃ
ぬちっ
「あなたっ❤❤
私のイく声聞いてっ❤❤
あなたより強いオスに
孕まされる声聞いてええっ❤❤」


あっ…
びゅくっ♡
しびびるぅっ!!


「はぁ…はぁ…❤
あなた…そういうことだから…
私たちのラブラブセックス
妄想しながら…一人寂しくシコシコ
してください…ね…❤」
「ふ～～っ…
寝取りセックス
気持ち良すぎ…」


それから数日…理子の通う学校で
保護者を装い侵入…もとい
三者面談にやってきた。


真理絵が、「パートのシフトが入っているため
都合がつかない」とのことで頼まれたのだが――
学校での理子の姿に興奮し
空き教室に忍び込みセックスを
始めてしまった。

「おい理子…入り口でコソコソ覗いてる男子…お前の知り合いか？」
「んっ❤…あぁ…斎藤くんだよ…なんかこの前コクられたんだけど…断った…んぁっ❤」


「そうかそうか…じゃあ全く脈がないと
証明するためにずっぽしハメるとこ見せないとな！」
ずっぷぅ
ぷるっ♡
「あんっ♥♥パパのおちんちん…きたぁっ♥」


「ん？どうした理子…
自分を好きな男子に見られながら
セックスするの気持ちいいか？」
ぐちゅ
ズチュ
ぐちゅ
ぬちゅ
ごちゅっ
パン
パン
あっ♡
んっ♡
パン
パン
んっ♡

ぐちゅ
ズチュ
ごちゅっ
ぬちゅ
パンパン
んんっ♡
あっ♡
パン
んっ♡
「んっ…だって…
ハズい…からぁっ♡」

「まったく…露出癖まであるなんて
理子はやっぱり淫乱変態JKだな」
ズチュ
ぐちゅ
ぬちゅ
ごちゅっ
パン
パン
あっ♡
んっ♡
パン
パン
んっ♡

ぐちゅ
ズチュ
ごちゅっ
ぬちゅ
パン
パン
んんっ♥
あっ♥
パン
パン
んっ♥
「いやっ…変態って言うなぁっ♥♥」


「ほらっ理子…片思いされてる男に
見られながら無様にイけっ！
イきさらせっっ！」
ぐちゅ
ズチュ
ごちゅっ
ぬちゅ
パン
パン
んんっ♡
あっ♡
パン
パン
んっ♡


ぐちゅ
ズチュ
ごちゅっ
ぬちゅ
パン
パン
んんっ♡
あっ♡
んっ♡
パン
「イく…イっちゃう…
見られながら…
おまんこビクビクって…ぇっ♡♡」

あはぁっ
びくびくっ!!
ビクッ
ビュビュッ!


「ふぅ…斎藤くん…気持ちよかった…
このことはチャラにしてもらえる…？」
「あっ…んっ…ふぁ…ぁ…」


…などと真理絵と理子に
激しめかつアブノーマルな状況での
セックスをしてしまったことが原因で…
ふたりは俺の家に押しかけて
『抗議』をしにきたのだった…。


「わぁっ…広いお家に
住んでるんですね九郎さん♪」
「ほんとほんと～♪いかにも
鬼畜なプレイが大好きなオジサンの
すみかってカンジ～♪ね？ママ」


「ご…ごめんなさい…
つい欲望に負けて…」
「元夫と電話させながら
エッチしたり？」
「教室であたしを好きな男の子の目の前で
エッチしちゃったり？」


「…返す言葉もないです…
どうすれば許してくれる…かな…？」
「ふふっ…それはですね…ね～理子❤」
「ママと相談したんだぁ…
それで…パパにも恥ずかしい思いを
してもらおうってことになったよ❤❤」


そしておもむろに俺のズボンと下着を脱がし始め…
ベッドに押し倒してきたのだった…！


「女の子にわる〜いことしちゃう
いけないおちんちんにはぁ…❤❤」
「理子ママのJKおっぱいと❤」
「ま…真理絵ママの
いやらしいおっぱいで
お仕置きしちゃいますね…❤❤」


「ま…ママぁ…!?」
「そうでちゅよ～♪
焦ってて超ウケる❤」
「理子…そろそろ始めましょうか❤」


「ほらっ…ほらっ❤どう?❤
理子ママと真理絵ママの
おっぱいにおちんちん
いじめられちゃってまちゅよ〜?」
むにっ♡
あっ♡
あん♡
ずちゅ
パン
パン


「すごっ…理子のハリのある
おっぱいと真理絵の
柔らかおっぱいのハーモニー……！」
あっ♡
むにっ♡
あん♡
ずちゃ
パン
パン


「こら！九郎ちゃん！
『ママ』でしょ～？」
あん♥
むにっ♥
「そうですよ九郎ちゃん？
しっかりおっぱいで
教育してあげますからね♥」
あっ♥
ずちゅ
パン
パン


「うっ…わかったよママぁ…
おっぱい気持ちいいよぉ…」
あんっ♡
むにっ♡
あっ♡
ずちゅ
パン
パン
パン


「あはっ♪
意外と早く
落ちたね❤」
「あん❤いま九郎ちゃんの
おちんちんビクッてした❤」
あっ♡
むにっ♡
あん♡
ずちゅ
パン
パン


「そろそろイきそうなのかなぁ？
ふふっ…じゃあトドメさしちゃおうかな❤」
あんっ♡
むにっ♡
あっ♡
ずちゅ
パン
パン
パン


「あっあっ…！
搾り取られるっ！」
「イって❤私たちのおっぱいの間で気持ちよく射精してくださいね❤」
あっ♡
むにっ♡
あん♡
ずちゅパン
ずちゅパン


「イっくううううっ！
ママあああああっ！」
「あっは…❤恥ずかしい格好で
情けなく射精しちゃったね❤」
ごめんね
「すごい…❤おっぱい妊娠しちゃいそう…❤」


「じゃあ気持ちよく射精したことだし…」
「私たちのことも気持ちよくしてください❤」


数分後――寝室


「それじゃあ理子…挿れるよっ…！」
「あっ…♥♥すごっ…深くに来てるぅ…♥♥」
ズプッ


「それにしても…真理絵とあんないやらしいご奉仕してくれるなんて…嬉しいよ」
あん♡
クッ
パンパン
くちゅ
あっ♡
はぁはぁ
ぬちゃ
パン
ぱっ


「んっ…♥ちょっとぉ！あれはお仕置きなんだよぉ…？」
あん♥
クッ
あっ♥
はぁはぁ
ぬちっ
パンパン
パンっ
ぱっ
くちっ


「ごめんごめん…でもふたりのおっぱい気持ちよかったからさ」
あん♡
クッ
パンパン
くちゅ
あっ♡
はぁはぁ
ぬちゃ
パン
ぱっ


「それならいいけど…
あん…♥♥すごいっ…
子宮に届いちゃうっ…
♥」
あん♥
ハッ
あっ♥
はぁはぁ
パン
ぱんぱん
ぬちっ
ぱっ
くちっ


「理子も何回もエッチしてだんだんと俺専用の形になってきたんじゃないか？」
あん♡
クッ
パンパン
くちゅ
あっ♡
はぁはぁ
ぬちゃ
パン
ぱっ


「なってるよぉ…♥私のおまんこ…絶対パパの形にぃ♥」
あん♥
ハッ
あっ♥
はぁはぁ
ぬちっ
パン
ぱっ
ぱっ
ぱっ
ニン
ニン
くちっ


「こみあげてきた…っ！
そろそろ特濃子種ミルクを
子宮にぶちまけるぞ！」
あん♡
ハッ
パンパン
くちゅ
あっ♡
はぁはぁ
ぬちゃ
パン
ぱっ


「出して…私のこと本当にママにしてぇっ♥」
あん♥
ハッ
パンパン
あっ♥
はぁはぁ
ぬちゃ
パン
ぱっ
くちゃ


「イくううううっ！」
「あああああっ♥♥♥♥」
びくん


「いやぁ最高だったよ理子…
今度はママのことも妊娠させてくるからね」


「うん❤❤私妹が欲しいなぁ❤❤」


理子とのセックスが終わり…
客室に待たせていた真理絵のもとへ
向かった。


「おまたせ真理絵
…さっきは理子に中出ししてきたよ」
「もう…それは母親の私に
わざわざ言うことなんですか？」


「はは…今度はちゃんと真理絵にも
がっつり中出ししてあげるってことだよ」
「まぁ❤それは楽しみですね❤」


「さぁほら…
いまから中出しされる
かわいいおまんこ
見せてくれ」


「は…はい…
私のおまんこ見てほしいです…❤」


「それじゃあお待ちかねのおちんぽ挿れるぞっ！」
「あっ❤九郎さんのおちんぽ様きたああっ❤」
ズプッ


「あぁっ…ねっとり絡みついて気持ちいいよ真理絵…」
オチュ
あっ♡
あん♡
ごっちゅっ
ぽんっ
ぷっ
ぷっ
ぷ


オマ
あっ♥
あん♥
ごりゅっ
ぱんっ
パーン
ぐっぷ
ぷっ
ぐぽっ
「あっあっあっ♥
激しいっ…♥」


「このおまんこから
理子が生まれたと思うと…
余計に興奮してくるな」
オマ
あっ♡
あん♡
ごりゅっ
ぱんっ
ぱーん
ぐっぷぷ
ぐぷっ
ぐぽっ

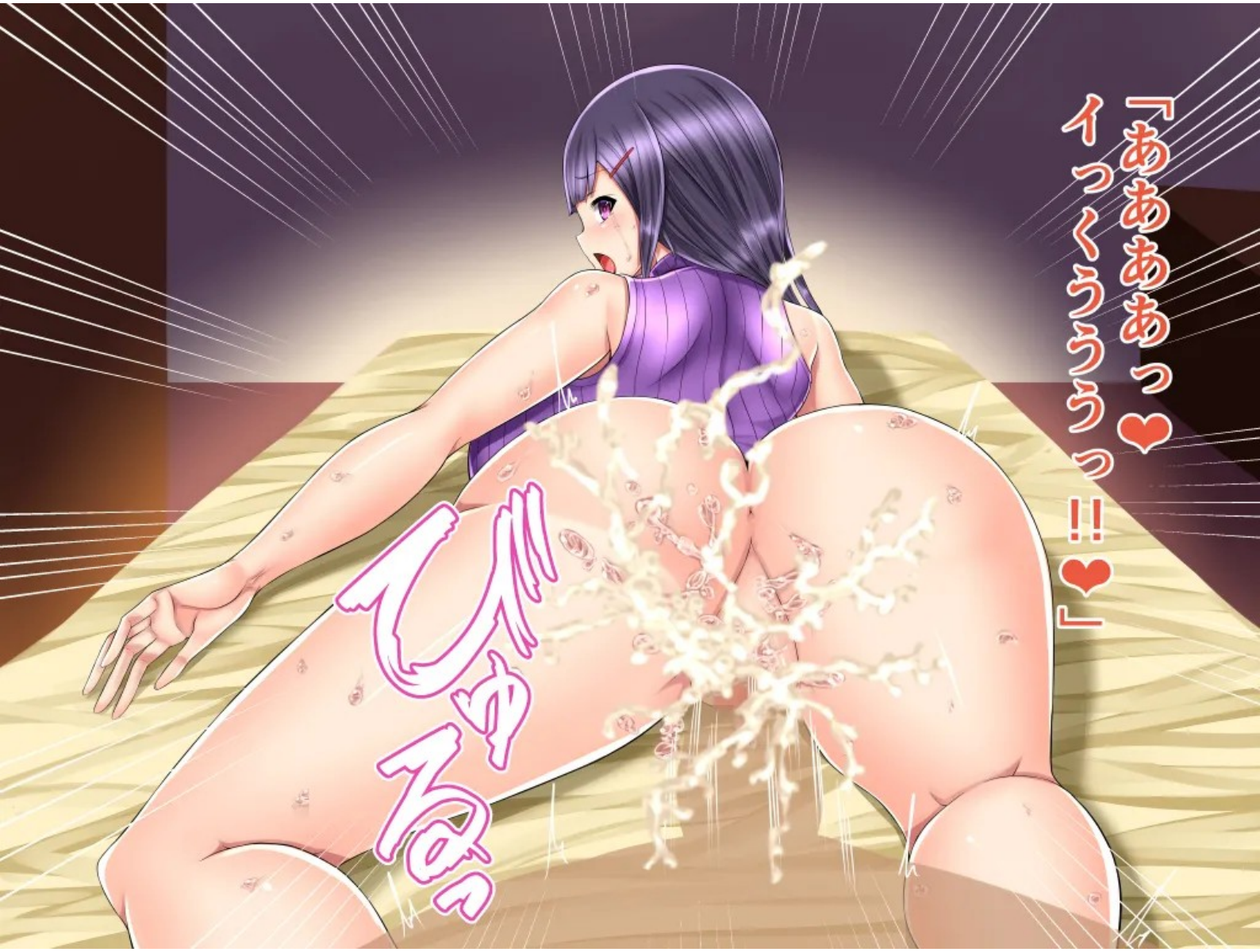

オチュ
あっ♡
あん♡
ごりゅっ
ぽんっ
パーン
ぐっぷぷ
ブプッ
ぐぽっ
「そうですぅ❤
このえっちなおまんこから
理子産みましたぁっ❤」


「このおまんこから
俺の子供も産んでほしいなぁ」
オマ
あっ♡
あん♡
ごりゅっ
ぱんっ
パーン
ぐりっ
ぶぷっ
ぐりっ
ぽっ


オマ
あっ♥
あん♥
「はいっ…産ませてくださいっ♥」
ごりゅっ
ぽんっ
パーン
ぐっぷぷ
ブプッ
ぐぽっ


「うおおお金玉から精子こみあげてきたぞ真理絵！射精するぞおおおおっ！」
オチュ
あっ♡
あん♡
ごぷっ
ぽんっ
ぷーん
ぐっぷぷ
ぷぴゅ
ぐぽっ


オマ
あっ♥
あん♥
「あっ…♥きてっ♥いっぱいおマンコの中で精液注入してえぇっ♥♥」
ごりゅっ
ぱんっ
パーン
ぐっぷぷ
ズプッ
ぐぽっ


「あああああっ❤
イっくううううっ!!❤」
ビクビク


「はぁ…すごい今までで一番出たよ」
「あっ…膣内からどぷっって出てきた…❤」


そして1か月後…
真理絵は高橋と別れ…


俺たちは真の家族になった。


まぁ…母娘ふたりとも肉体関係を
持っているので普通の家族とは違うが…


「今日はぁ…私たちがほんとの家族になった記念日だね♡♡」


「九郎さん…いえ…あなた❤❤
お礼の母娘フェラ…味わってくださいね❤❤」


「真理絵…理子…
それじゃあおちんぽに
おくちでご奉仕してもらおうかな」
ぺろっ
ちゅぱっ
ハァハァ
くちゅ
ふぇ…
ハッハッ
ちゅ♥
むにっ♥
ソワッ


「んぁっ…すごい…あたしたち…このおちんぽでこれから毎日しつけてもらえるんだね…❤」
ぺろっ
ちゅぱっ
ハァ…ハァ…
くちゅ
ちゅ❤
むにっ
ハッ♡ハッ♡


「ちゅぱっ…❤気持ちいいですか？あなた…❤❤」
ぺろっ
ちゅぱっ
ハァ
ハァ
くちゅ
ふぅ…
ハッ
ハッ
ちゅ❤
むにゅ


「最高に脳にクる快感だよ…
そうカリの部分もっと舐めて」
ぺろっ
ちゅぱっ
ハァ
ハァ
くちゅ
ふぅ…
ハッ
ハッ
ちゅ♥
むにっ♥


「じゅるるるっ♥ぷはぁっ…♥♥パパのおちんぽマジたくましすぎ♥」
ぺろっ♥
ちゅぱっ♥
ハァハァ♥
ふぅ…
ハッハッ♥
ちゅ♥
くちゅ♥
むにっ♥
ソフッ


「あっもう理子ずるい！
ぢゅるるるっ❤❤
私も九郎さんのおちんぽ
ぺろぺろするんですから…❤」
ぺろっ
ちゅぱっ
ハァ
ハァ
くちゅ
ふろっ…
ハッ
ハッ
ちゅ❤
むにっ❤
ハァ


「真理絵と理子のおっぱいとかわいいお顔見てると永遠に勃起できそうだよ」
ぺろっ
ちゅぱっ
ハァハァ
くちゅ
ふぅ…
ハッハッ
ちゅ♥
むにっ♥
ソフッ


「んっ❤あたしも…パパのおちんぽならずぅっとご奉仕したい❤」
ぺろっ
ちゅぱっ
ハァ…ハァ…
くちゅ
ちゅ❤
むにっ❤
ハッハッ
ふぅ…


「あなた…♥いっぱい私たちのカラダで気持ちよくなってください♥」
ぺろっ
ちゅぱっ
ハァ…ハァ…
くちゅ
ふぅ…
ハッ…ハッ…
ちゅ♥
むにゅ♥
ソフッ


「ぐっ…イきそうだ…エロい顔で受け止めるんだふたりとも！」
ぺろっ
ちゅぱっ
ハァ
ハァ
くちゅ
ちゅ♥
ハッ
ハッ
むにっ♥
ふぅ…


「あぁん❤射精して…❤理子のお顔にいっぱいパパの赤ちゃんミルクちょうだぁい❤」
ぺろっ
ちゅぱっ
ハァハァ
くちゅ
ちゅ❤
むにっ❤
ソフッ
ふぅ…


「あなた❤❤真理絵のいやらしいおちんぽ顔にいっぱいお情けザーメン恵んでくださいっ❤❤」
ぺろっ
ちゅぱっ
ハァハァ
くちゅ
ぷるっ…
ハッハッ
ちゅ❤
むにっ❤
ソフッ


あぁ〜キたぁ♡
ビクビク!!
あっ
んっ
ぴゅるる!
あん♡
射精てるぅ〜
いっぱい〜


「はぁ…♥パパの精液の量
えぐすぎ…♥」


「これ…のどに絡みついて…❤
あなたにおくちまで妊娠
させられちゃいますね…❤」


冴えない40のサラリーマンの俺は
突然ふたりの家族と幸せを
手に入れた…


始まりは理子の
奇妙な提案からだったが…
いまでは心から提案に乗って
よかったと思っている。


そして1年後…俺たちに新しい家族が
『ふたり』増えることになるが…
この時の俺はまだ知る由もなかった


「…ほら理子！学校遅れちゃうわよ？」


「は～い！でもパパも遅れてるよぉ？」


「ごめんごめん…すぐ行くよ！」
「あなた❤もう今は2児のパパなんですからしっかりしてくださいね？」


「そうそう❤あたしの子と新しい妹の
自慢のパパになってもらわないと❤❤」


…ということでいろいろ
大変そうだけど…
愛する家族のため…
今日も頑張るか！


もっと大きな幸せを
彼女たちに『買う』ために――。


❤END❤